

YAMAKADO NEWSLETTER

NO.117

2009/08/20

山門水源の森を次の
世代に引き継ぐ会

猛暑の中階段補修はつづく



観察コース階段補修作業 (09/08/05)



観察コースの倒木処理 (09/08/08)



北部湿原堆砂除去作業 (09/08/03)

「山門水源の森」の生物多様性を保全する。という大義名分と一般公開されている「山門水源の森」を訪れる方々の安全を確保しつつ、ガイドも通じて生物多様性を保全することが何故必要なのかを一般常識化してゆけるのか日々会員は悩んでいます。受入側としては、訪問者の安全を最優先しなくてはなりません。限られた要員と財政では、どうしても保全作業が後回しになってしまいます。明日訪問された方が、ここに階段が無かったばかりに怪我をされるのではと思うと、ついついその作業が優先され保全作業は後回しになってしまいます。63.5ha という森の面積と地域が集水域に限られているということは、生物多様性の保全という面では恵まれています。しかし、保全という面から考えるとこの面積は広大です。まして、昨今の異常気象(スコール化した降雨等)に対応しつつ保全作業を進めることは口で言うほど簡単なことではありません。現在の生物多様性を保全できてこそ「山門水源の森」の存在が有意であるわけですから、今後も万難を排して両立を目指したいものです。こんな悩みを抱えつつも、付属湿地創造以来初めてチョウトンボ(種としては珍しいものではない)が飛来したことは、創造直後にモリアオガエルの産卵を観た時の感動と、正当な仕事



初飛来チョウトンボ (09/08/08)

の見返りは必ずあると再確認することが出来ました。

「山門水源の森を次の世代に引き継ぐ会」

<http://www.digitalsolution.co.jp/nature/yamakado/>

リピーターの増加の意味

年々リピーターの訪問者数が増加してきました。交通の便という点では、「不便」そのものです。にもかかわらずリピーターが増加してきた。その理由を吟味する必要があります。森の中に「山門湿原」が有るということ、四季の景観の変化等も要素であることには間違いありませんが、それだけでは説明が付かないことが見受けられます。景観という理由であれば、これくらいの場所は他にも心当たりは沢山あります。編集子は、その理由の1つに「保全活動」に足場をおいたガイドに有るのではないかと考えています。個々の動植物の名称を解説するだけなら、楽舎に帰り着くまでにその大半は頭に残っていません。そのようなガイドならリピーターにはならないと思われます。とすれば他に何がリピーターを産んで



付属湿地で真剣な観察が続く (09/08/04)

いるのでしょうか。それは保全作業に裏打ちされた、生物多様性を十分に認識したガイドがあるからだと思われます。その証拠の1つに、取材にきた日本自然保護協会の人々が、編集子に「こんなにも保全活動に関する話が多いとは思いませんでした」と漏らされたのを思い出します。

地味な観察から 「生物多様性の保全」「来訪者の安全」等々を第一義に保全作業に追われ、「森の

観察」がついつい二の次になっています。しかし「森の生物の多様性」を語るなら、その実態をもっと詳細に観る必要性を痛感する最近の観察例を3つ紹介します。右の画像は、8月16日森林レンジャーの藤澤氏が付属湿地で観察されたシマヘビがジュンサイの茎を食いちぎって運搬しているものです。シマヘビが何のためにジュンサイを食いちぎって運搬しているのか。撮影するために近づいたらジュンサイを放置して逃げたとのことですが放置されたジュンサイは翌日もその場にありました。何のために（喰うため?）、何故ジュンサイだったのかという疑問は残ります。次はカナヘビがヒグラシを喰っている画像です。この画像では、既にヒグラシの頭の部分は無くなっています。既号でヒグラシにアブが食いついている画像を紹介しました。森の中をこのシーズン歩いていると、ここかしこでヒグラシが足元から飛



ジュンサイを運ぶシマヘビ (09/08/16)

び立ちます。ヒグラシのこのような性質がなければカナヘビに喰われることも少ないのですが、何故こうも地面近くに居るのでしょうか。食物連鎖という観点からも興味湧くところです。



ヒグラシを喰うカナヘビ (09/08/15)

3つ目は、南部湿原脇でのモリア

オガエルの幼生です。水中でオタマジャクシの時期を過ごし森へ入る前の状態です。陸上に上がった幼生には、未だ尻尾が残っているものもあります。この幼生が湿原の周りに数多く観察出来ます。それらの個々の状態をつぶさに観察することや、その後の状態を観察することも必要と分かりつつもそうしたゆとりが無いことが悔やまれます。例にあげた観察は、いずれも偶然その場に居合わせて撮影したということで終始しています。しかし「森の生態系」を理解するためにはこうした動植物の小さな行動や状態にも観察の目を広げる必要があります。ついつい目先の成果に追われがちになりますが、空振り覚悟で腰を落ち着けて観察を続ける時期が来たのかも知れません。が片方でやっぱり保全作業も待ったなしです。



ひきづったジュンサイ (09/08/17)



南部湿原脇の幼生 (09/08/18)